

平成16年度一橋大学附属図書館・経済研究所企画展示

都留重人と激動の時代

～いくつもの岐路を回顧して～

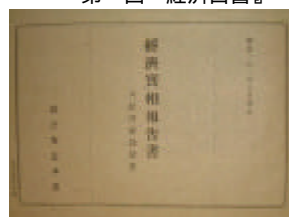
昨秋、経済研究所に、都留重人名誉教授から膨大な資料が寄贈されました。それは、昭和戦前期、戦中・戦後、そして高度成長期という激動の時代を生き、絶えずその時代に鋭い批判的な問題提起を行い、学問形成をされてきた、わが国を代表する国際的な経済学者の知の軌跡を克明に示しています。

都留先生は、1930年に治安維持法違反で検挙され、旧制八高を除名となり、その後渡米し、1933年にローレンスカレッジからハーヴァード大学に転校、同大学で博士号取得後、1942年交換船にて帰国しました。戦後、先生は、1947年に第一回『経済白書』を執筆、1963年公害研究委員会を発足させ、1949年一橋大学経済研究所長、1972年一橋大学学長、1977年第10代国際経済学会(IEA)会長を歴任されました。シュンペーター、サムエルソン、スウィージー、ノーマン、ガルブレイスら多くの知人・友人に囲まれて、都留先生はマルクス経済学者と主流派近代経済学者との対話に努め、外からの眼と内からの眼で日本と世界の経済を批判的に研究し、「一点の凡も許さない」学問の形成をされてきました。激動の時代を生き、いくつもの岐路を経て、時代の形成に寄与されてきた経済学者の軌跡をここに紹介したいと思います。



清水崑画伯筆似顔絵

第一回 経済白書



展示・講演会

《展示》

日時：平成16年10月25日(月)～11月5日(金)

9時～17時(入場は16時30分まで)

ただし 10月26日(火・講演会開催日)は19時まで

10月30日(土)、31日(日)、

及び11月3日(祝)は15時まで

会場：一橋大学附属図書館公開展示室

(西キャンパス・時計台棟1階)

《講演会》

講師：都留重人名誉教授、鶴見俊輔氏、

伊東光晴氏、宮本憲一氏(順不同)

日時：平成16年10月26日(火) 14時～17時

会場：一橋大学マーキュリーホール

(東キャンパス・マーキュリータワー7階)



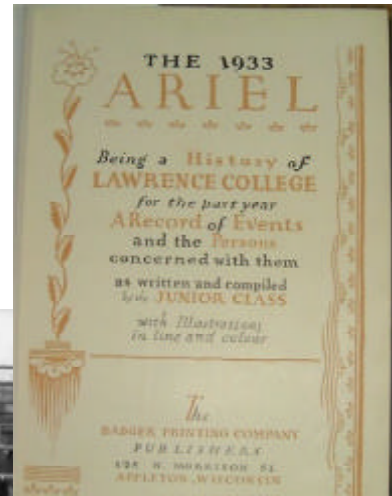
展示・講演会とも無料

ハーヴァード時代およびそれ以前

都留重人先生は1912年3月東京生まれ、愛知県立熱田中学から旧制第八高等学校に進学しましたが、治安維持法「改正」による大検挙で八高を除名となりました。その後1931年まだ日本人の少なかった米国のローレンスカレッジに留学後ハーヴァード大学に転校、学究生活のスタートを切りました。黄金時代を築きつつあったハーヴァード大学

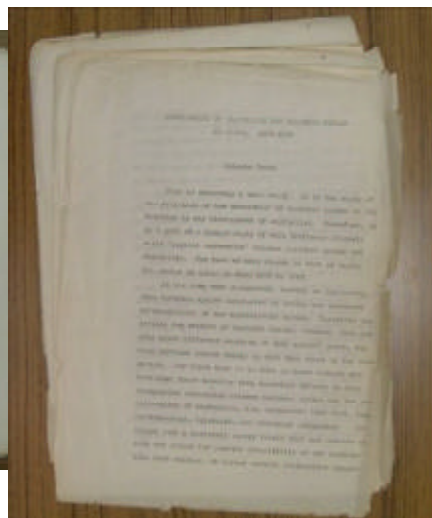
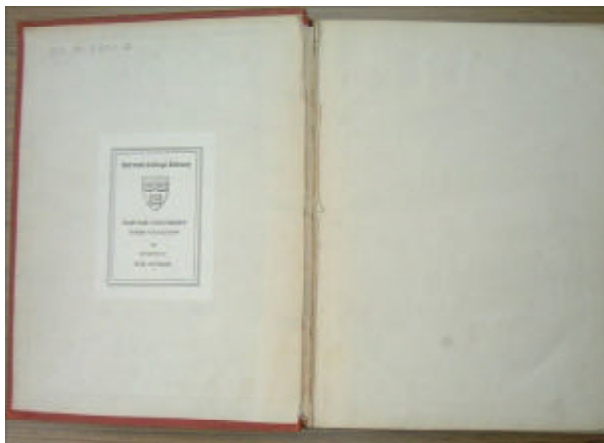


ローレンスカレッジ 長距離ランナーチーム -1932- (右から二人目)



経済学部でシュンペーター、サムエルソンをはじめとする数々の師友と出会い、博士号を取得、優秀な論文を発表し幅広く活躍しました。これら師友との戦前および戦中戦後を通じての心暖まる交友は、生涯にわたり現在まで続いています。

都留先生より寄贈された資料の中にはこの学生時代のノートを始め、提出されたレポート、その後の研究の基礎となる主な学术论文、学位論文などが含まれています。



ハーヴァード大学に提出した学位論文とその原稿 -1940-

戦中戦後

滞米中の1941年に日米は開戦。敗戦を予想しその時祖国にいることを希望して、1942年交換船で帰国した都留先生は、日本での研究活動を開始します。

東大での特別講義後、東京商科大学東亜経済研究所(現一橋大学経済研究所)嘱託研究員となりますが、召集を受けて入隊、3ヶ月の二等兵生活を送りました。除隊後大使館二等書記官として外務省役人となり、1945年3月～5月「クーリエ」(伝書使)としてソ連へ出張、終戦を迎えました。



引揚日記 1942年7月25日 ポラナ・ビーチ

戦後は卓抜した英語力と学識をかわれ、占領軍総司令部経済科学局(ESS)に勤める一方東京裁判の予審尋問にも通訳として同席、その他にも連合軍最高司令部(SCAP)とのパイプ役を務めました。また1947年に社会党の片山内閣が成立すると、経済安定本部次官に任命され、第1回経済白書『経済実相報告書』を執筆、経済実態分析と共に復興再建に尽力しました。

また、1949年には日本の税制改革についての勧告のため「シャウプ使節団」が来日し、その公式顧問役を池田勇人大蔵大臣から任命され、占領下の経済政策にも貢献しました。



木戸幸一戦犯予審通訳時の手記 -1945-



◀ シャウプ氏と公式顧問役の辞令 -1949-

一橋大学関係



『Hitotsubashi in Pictures』(1951年刊)より。研究所長時代

1946年東亜経済研究所は経済研究所と改称され、1949年にはその目的を「日本及び世界の経済の総合研究」と決めました。教授に就任していた都留先生は、経済研究所選出の専任初代所長に選出され、1956年まで4期にわたり、さらに1965～67年にも再度所長を勤めました。所長として戦後の経済研究所の基礎を固め、ブロンフェンブレンナー、ジョン・ロビンソンを始め内外の学者とのゼミナールを開設、学部と研究所の交流にも力を注ぎ、研究所及び大学の発展に大いに貢献しました。

また研究所機関誌『経済研究』も都留所長時代に創刊されています。今回寄贈された資料の中には、所長当時の自筆メモ、研究の中核となった研究所員から提出された研究計画書、資料室新着図書リストなども含まれています。

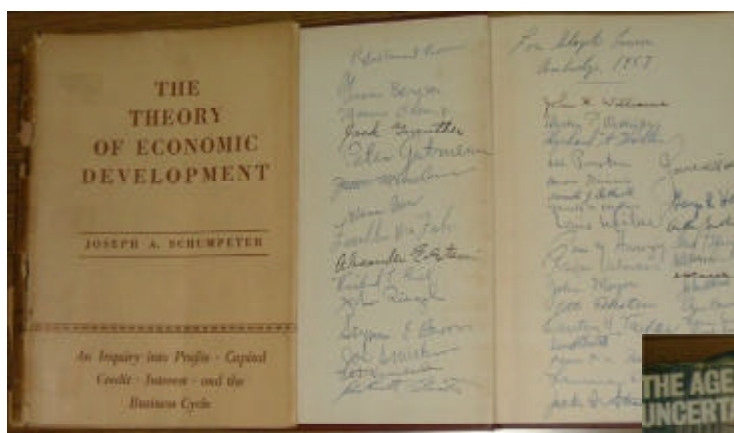
また、ハーヴァード時代の旧師旧友に一橋大学図書館の蔵書の充実を訴え、それが現在の附属図書館シュンペーター文庫の基礎となりました。

学園紛争を経て1972年には一橋大学学長に就任。バート・フランクリン文庫の受入に尽力するなどして、1975年に退官を迎えました。

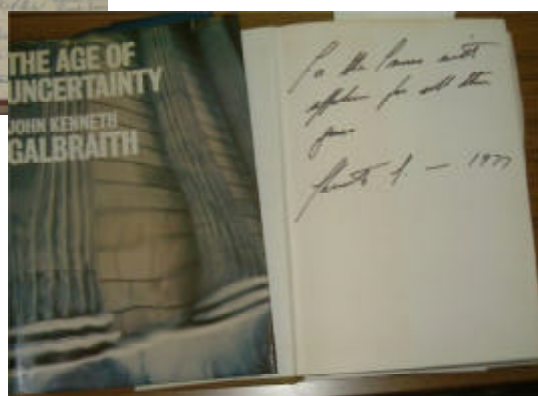


1975年3月 一橋大学評議会。学長時代

交友関係



ハーヴァード大学経済学部黄金時代に研究生活を送った都留先生は、交友関係に恵まれ世界的に著名な学者との親交が知られています。寄贈資料の中核を形作るの



ハーヴァード大学経済学部送別会で贈られたサイン本 - 1957 - がこれら知人たちとの往復書簡で、中でもガルブレイス、レオンチェフ、サムエルソン、スウィージーなど親交の深かった学者とのやりとりは歴史的な価値を持つものです。会議開催の準備や寄贈図書への礼状等も含めて丹念に保存されている手紙の数は、日本人外国人あわせて約 1000 人にもものぼります。

『不確実性の時代』原書(1977年刊)とガルブレイス氏の献辞

また一橋大学のほか、日本経済新聞による著名な経済学者の招聘等にも協力し、ハンセン、トリファン、レオンチェフ、サムエルソン等の来日を実現しました。

国際的経済学者としてはハーヴァード大学、エール大学の客員教授を始めとして、ECAFE 専門委員としての出張、日米民間人会議、国際社会科学評議会(ISSC)への参加、また、国際経済学会(IEA)でも活躍し、第 10 代の IEA 会長を務めました。

ハーヴァード大学名誉学位授与式(1985)。
エスコートはガルブレイス氏



1959 年来日したサムエルソン氏と、日光にて

公害関係

都留先生は古くはアメリカのTVAへの関心をはじめとして公害問題に強い関心を持ち、ライフワークとしてその研究解明に取り組んで来ました。戦後いち早く「TVA研究懇談会」を設立、1963年には「統計研究会」の中に「公害研究委員会」を発足させました。その後も公害現場での調査活動、政府への働きかけを精力的に続け、機関誌『公害研究 学際的協力をめざして』を発刊しました。



1970年 公害シンポジウムの参加者一同



『公害研究』7巻4号(1978)自筆漫画原稿

その後『環境と公害 自然と人間の共生を求めて』と改題し現在に続いています。1970年には世界中から専門家を招いて公害シンポジウムを東京で開催、「東京決議」として「環境権」の構想を採択しました。この国際シンポジウムに関する資料、水俣病を始め各公害に関する草の根的な資料も丹念に収集されています。



公害関係資料

手稿・研究資料より

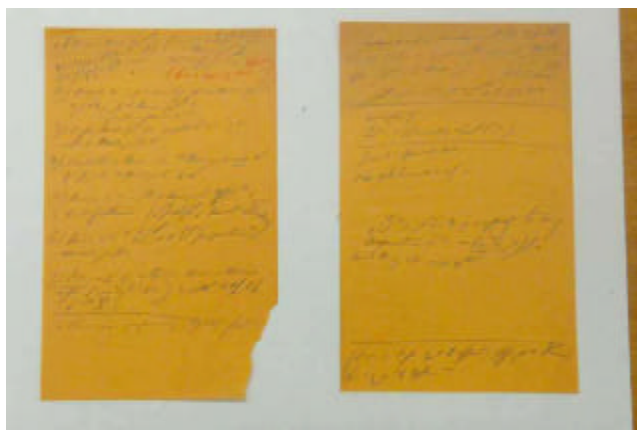


サムエルソン 『経済学』原著9版校正原稿

本人や御遺族によって寄贈されています。附属図書館では、これらの散逸を防ぐと同時に、研究者や市民に公開し、かつ、未来に残すため、保存措置と複製、電子媒体化等 アーカイヴィングを行っています。

この中のひとつに、サムエルソン「経済学」翻訳原稿をはじめとする都留先生の執筆原稿や収集資料も含まれています。

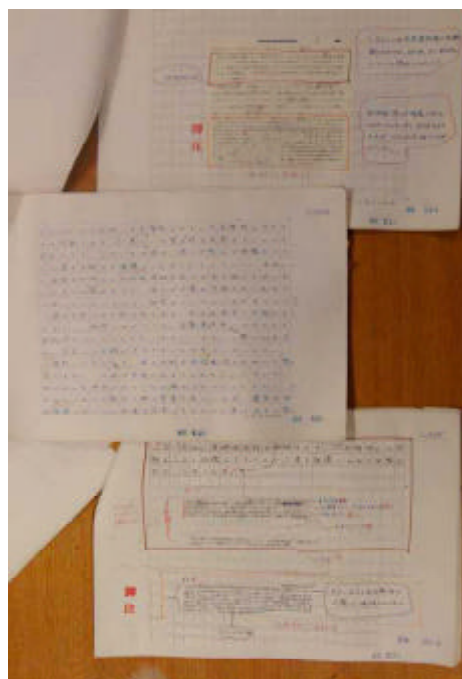
また、図書館所蔵のシュンペーター文庫のなかには、シュンペーター直筆のメモ類が挿入されていたものがあり、これらも保全措置を施したうえに収集されました。



シュンペーター文庫挿入メモ

一橋大学は、その起源である商法講習所以来の高等職業教育機関と、「社会科学の総合大学」としての学術教育・研究機関という、ふたつの伝統を兼ね備えています。戦前戦後を通じて、実業界や政官界に多数の人材を送り出す一方、人文社会科学分野において、多彩な研究者、教育者、理論家が集いました。

そして、これら先達が収集し、あるいは書き残した研究記録、論文原稿、講義録や書簡、日記、さらには学生時代のノートやレポートといった膨大な資料が、



サムエルソン 『経済学』原著9版翻訳原稿

都留重人名誉教授略歴

- 1912(明 45) 3月6日東京で生まれる。父 信郎、母 いよ。姉1人妹2人
- 1925(大 14) 愛知県立熱田中学(旧制)入学。病氣入院のため、進学が1年遅れる。
- 1929(昭 4) 第八高等学校(旧制・名古屋)入学。社研、陸上部に所属
- 1930(昭 5) 治安維持法違反容疑により検挙。三ヶ月後起訴猶予で釈放され、八高は除名
- 1931(昭 6) 米国ウィスコンシン州のローレンスカレッジ入学
- 1933(昭 8) ハーヴァード大学に転校。シュンペーター教授と出会う。
- 1934(昭 10) ハーヴァード大学学部卒業、大学院進学。サムエルソン、ノーマン等と出会う。
留学中の柴田敬と知り合う。
- 1936(昭 11) 修士号取得
- 1937(昭 12) 母いよ死去、一時帰国
- 1939(昭 14) 和田小六氏(木戸幸一の弟)の長女正子と結婚、再度渡米
- 1940(昭 15) 博士号取得
- 1942(昭 17) 日米開戦後、交換船で帰国
- 1943(昭 18) 東京商科大学東亜経済研究所(現一橋大学経済研究所)嘱託研究員となる。
- 1944(昭 19) 都城の部隊で三ヶ月の二等兵生活後、外務省勤務。『米国の政治と経済政策』出版
- 1945(昭 20) ソ連出張。終戦。東京裁判に立ち会う。GHQの関係で来日したノーマン、ガルブレイス等と再会
- 1946(昭 21) 連合国最高司令部経済科学局調査統計課(ESS)に勤務
- 1947(昭 22) 片山内閣のもと、経済安定本部次官に任命。第一回経済白書「経済実相報告書」を執筆
- 1948(昭 23) 東京商科大学(現一橋大学)教授就任。自宅で背広ゼミ始まる。「平和問題談話会」に参加
- 1949(昭 24) 研究所選出の経済研究所初代所長になる(昭和24年11月～31年10月)。
シャープ使節団来日、公式顧問役に任命。研究所でブロンフェンブレンナーと共同講義
- 1950(昭 25) 『経済研究』創刊
- 1951(昭 26) 日本学会議会員(第2期)になる。
「所得と富」学会第1回会議(フランス)出席の為、戦後初の海外出張
- 1956(昭 31) 戦後初めて渡米、ハーヴァード大学客員教授
- 1957(昭 32) 滞米中、上院の喚問を受ける。6月帰国
- 1959(昭 34) サムエルソン来日で通訳と案内。以降日本経済新聞による著名な外国の経済学者招聘に協力
- 1960(昭 35) エール大学客員教授、ハーヴァード大学卒25周年記念行事参加等、1961(昭 36)9月まで米国滞在
- 1963(昭 38) 統計研究会に「公害研究委員会」発足
- 1965(昭 40) 再び経済研究所長になる(昭和40年2月～42年1月)。
- 1970(昭 45) 東京で公害国際シンポジウム開催
- 1971(昭 46) 『公害研究』創刊
- 1972(昭 47) 一橋大学学長就任
- 1973(昭 48) パート・フランクリン文庫の購入受入に尽力(1974年収蔵)
- 1975(昭 50) 一橋大学学長退任、朝日新聞論説顧問就任(1985年まで)。『著作集』13巻の刊行開始(1976まで)
- 1977(昭 52) 第5回国際経済学会(IEA)を東京で開催、第10代IEA会長に選出される。
- 1985(昭 60) ハーヴァード大学で名誉学位授与される。
- 1986(昭 61) 明治学院大学教授就任(1990退任)
- 2001(平 13) 自伝『いくつかの岐路を回顧して』を出版

平成16年10月25日発行

一橋大学附属図書館

〒186-8602 東京都国立市中2丁目1番地

URL: http://www.lib.hit-u.ac.jp/service/index_Ja.html

一橋大学経済研究所

〒186-8603 東京都国立市中2丁目1番地

URL: <http://www.ier.hit-u.ac.jp/library/index-j.htm>

本パンフレットに掲載された文章、写真、図版等の著作権は、特記あるものを除いて一橋大学附属図書館または経済研究所に属します。

著作権者からの許諾を得ずに、著作権法の定める範囲を超えて、引用、複写、電子媒体化等を行うことは、禁止されています。